南 一 弘の

街を行く

第109回 熱海 Atami

今年からは「新しい観点」で

2020年の幕明けとともに心機一転、新しい観点から本連載を始めてみたいと思います。通常の街歩きと違い、今回は街の「顔」と「価値観」についてお話します（タイトルを熱海としたのは、じつは熱海の家でこの原稿を書いているからです。悪しからず…）。

筆者が連載を通じて数多の街を訪ねるたび、ひしと感じるのは「人・モノ・カネの集中」です。東京や地方大都市で一極集中が加速度的に進むなか、周辺都市では流出が著しく、もはや再生不能なレベルに達している街も少なくありません。

衰退した街はほぼ同じ道筋をたどっています。産業が衰退し地元若者は職を求め大都市へ移転、残るは高齢者のみ。税収の落ち込みで財政難となった自治体は、やむなくリストラを実行するも生活や経済活動に必須なインフラさえ停滞する有様です。こんな状態でいくら「元気出せよ地方都市！」と言っても“お題目”に過ぎません。「地方活性化」を謳う経済フォーラムも盛んに開かれていますが、その壇上では何ら具体的な話はないのです。

では、日本の地方政策には、いったい何が一番足りないのでしょうか？

それは、地方の「顔」と「価値観」の問題です。

地方の「顔」とは、つまり“特性”です。それがないのは地方活性化の決め手は「いかに“ミニ東京”になるか」だと間違って捉え、その街に本来あった特性を自らの手で打ち消しているからです。さながら日本国中が競って（どこも同じ）“金太郎飴街づくり”をしているようなものです。

新春の熱海で、地方の街のこれからを思考する

本コラムで何度も書きましたが、地方の新幹線停車駅での金太郎飴化現象は顕著です。駅ビルや駅前商店街はナショナルチェーンの飲食店ばかり。違うのは駅前に建つ街のシンボルの銅像や彫刻くらいです。それに、第三セクターとかがやたら介入したからなのか“建前だけのプロジェクト”になってしまっています。

価値観で言いますと、東京や大都市の生活様式ばかりが全国いたる所で紹介され脚光を浴びています。便利で楽なライフスタイルはもはや過去です。今一番重要なのは“自分らしさの追求”ではないでしょうか。つまり他との比較ではなく「自分でしか出来ないこと」を探すのが大事なのです（これには大いに教育システムが影響していると思います）。

米国を見て下さい、地方の街を訪れてまず気づくのは街ごとに顔が違います。街それぞれが文化を大切に継承し、同時に、その街ならではの“革新”も盛り込んでいる。だから優秀な人材が大都市へ流出せず、街に留まっているのです。

大都市に行かずとも十分満たされる世界（価値観）がある。そこには、地方の教育システムの充実と特性がしっかりと盛り込まれています。

最近、日本でも地方の教育機関の充実と見直しが叫ばれはじめました。これからは何かにつけてテックの時代ですから、どこに居住していても変わらぬ仕事が可能です。でも、あくまで、その街の特性を生かしたテックが生み出されることをお願いします。

南 一弘

1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。